熊本大学教育学部紀要、第六五号、三二七―三三四、二〇一六

日本篆刻家の研究

―山田正平の用具・用材について―

神野雄二

一　はじめに

印学は、印章や篆刻を対象として、これを科学的・総合的に研究する学問である。印章は古代メソポタミア文明に端を発し、東西文化圏に伝播し、欧亜大陸のほぼ全域に広まった。中国において印が使用され始めたのは戦国時代である。印章は七千年の歴史を有しており、他の文化や芸術などの諸領域との関連も深い。

日本の最も初期の印章は、隋唐時代印制の影響のもと所成された。時代が下るに従い、その形姿・印風に別趣の風格がみられるようになった。十七世紀以後、明朝崩壊後、中国から黄檗禅僧がわが国に渡来し篆刻を移植した。その後印学の学問の隆盛と相俟って多くの印人が活躍するようになる。十八世紀中ごろ、印聖と称される高芙蓉（一七二二―一七八四）が出現し、秦漢の古印への復古が提唱され、彼の門流一派により全国各地に伝播しゆくこととなった。明治期になると、芙蓉派による古体派とともに、小曽根乾堂や篠田芥津らの新傾向の篆刻家が出現する。また山田寒山や河井荃廬などが渡支・遊学し彼の地の篆刻を学んで帰国、新味溢れる作品を制作、大正・昭和の印壇が形成されることとなる。

さて、日本における印学の研究、印章や篆刻そして印人や印譜の、広い視野に立った体系的な研究はまだ十分なされているとは言えない。本研究は、日本の印章や篆刻の歴史的、文化史的な解明を目的としており、総括的には日本の印学の体系化を目指している。これは書学・書道史の対象としてだけではなく、美学・美術史、歴史考古学、文化史等その裨益するところは甚だ大きいと思われる。

これまで、日本や中国における印章や篆刻家に興味を持ち、それへの史的考察や作品研究をテーマに据え論考を発表してきた。日本の篆刻家の研究、主として高芙蓉研究、並びに彼を祖とする芙蓉派の一系譜と目される、源惟良、小俣蠖庵、福井端隠、山田寒山、山田正平等の事跡の調査・研究と作品分析、そして印学の継承とその発展を探ることを問題としてきた。また、わが国の印人伝における唯一の専著と言える中井敬所の『日本印人伝』(1)をさまざまな文献・資料より拾遺し補訂することを課題としている。篆刻の専家はもちろん、篆刻に関わる傍系の文人・芸術家の研究を併せて進めている。

本稿は、昭和時代を代表する篆刻家山田正平（明治三十二―昭和三十七、一八九九―一九六二）における、彼が使用した用具・用材を紹介し、用具・用材観を探るものである。

二　山田正平の生涯

山田正平の生涯に関して略述しておく。

山田正平は、新潟県の出身である(2)。号は更生・幾盦・一止廬・一止道人。父は篆刻家木村竹香、母はマス。正平は次男。のち山田寒山の養嗣子となる。十五歳の頃から父木村竹香のもとで篆刻に志す。大正三年十六歳、山田寒山の勧めにより上京する。この頃京都に遊び、土田麥僊の知遇を受け国画創作協会の同人たちに紹介される。さらに二松学舎に入塾し、三島中洲などから漢学を学ぶ。大正七年二十歳、山田寒山が没し、寒山の養嗣子として再び寒山寺に入り長女喜美子と結婚する。大正八年、河井荃廬に随伴して上海に渡り、呉昌碩・徐星州より益を受ける。大正十一年第二回めの中国遊学をする。昭和十四年四十一歳、第一回個展を銀座鳩居堂にて開催する。その後、昭和十九年と二十三年に個展を開く。昭和二十三年第四回日展に「功在不捨」を依属出品、翌二十四年審査員となる。昭和二十八年五十五歳、東京学芸大学書道科の講師に就任する。以後、展覧会では日展を中心として活躍する。昭和三十七年六十四歳、第三次訪中日本書道団団長として訪中する。途次船中にて発病し帰国する。東京警察病院に入院し加療するが、同年八月十六日、腹部大動脈瘤のため没した。墓地は東京多磨霊園にある。

正平は、豊かな詩情を持ち、書・画・篆刻の三絶をよくした。最も初期の印

譜である『梅檀二葉香印譜』や大正五年十八歳の時編まれた『正気印譜』は、明末の何震を首とする徽派の趣きや、高芙蓉の流れを汲む山田寒山に師事したため芙蓉派の風趣がみられる。その後、呉昌碩・徐星州・銭瘦鉄に接し呉派の作風に傾く。幼少から交流を持った会津八一の秦・漢印を宗とする篆刻観の影響も覗える。昭和二十七年五十四歳、第八回日展に「應無所住而生其心」を出品し、文部省の買い上げとなった。これは芙蓉の正統を継ぐ佳作である。正平の篆刻の多くは、印篆体を基本としているが「忘牝牡驪黄」「和而不同」などは大篆体の趣きがあり、金文体へと遡る自在さを感じさせる。昭和三十七年、日本書道美術院展に出品した「無人華落」は絶作といえるものである。正平の篆刻は、感興を重んじた悠然とした刻風であり、呉昌碩や丁敬の長を融合し、直ちに古璽、秦・漢印の古格に通じるものである。

書は各書体をよくしたが、篆書は豪放雄偉で金農・鄧石如の書に一脈通じている。画は、朱耷の妙味に傾倒したが、小川芋銭との交流は長く続けられており、画への考え方に影響が見られる。更に近代を代表する画家富岡鉄斎に心酔した。

西川寧は増補版『山田正平作品集』の序文「一止道人の印譜・序」（木耳社、昭和五十九年七月）で次のように述べる。

文人という言葉は古いが、今日でも昔と違う意味で使うにふさわしい場合がしばしばある。いい言葉だと思う。そのある段階と解釈して一止道人の印は、その書と画とともに実に文人らしい作である。或はこんな文人は又となかったといってもいいのではないか。

道人は初めから印学のおきてに随うことを好まなかったのかと思う。私は道人の初期の印をよく知らないが、時の篆刻者流を抜け出ていたればこそ、蘭台とかたらって泰東書道院に入ることをすすめたのである。しばしば見るようになってから、たしかに印は徹して坐っていた。こころの揺曳にまかせて定型を排除しながら、自ら特別の土俵を作りあげていた。それは気ままのようでいて動かすべからざる風格であった。俳諧のこころを広げて、道人の印を俳精神と見る人があるのではないかと思うが、近世日本の永い印の歴史で既にあっていい筈で、まだ無かったものをきり開いた人である。

また、昭和を代表する篆刻家二世中村蘭台と比較し「二世蘭台は探美の人、一止道人はむしろ生活の人であるのか」と言う。

「芸術は人なり」といういい古された言葉があるが、正平の生涯を通覧していると、この言葉が実に生き生きと蘇ってくる。

三　山田正平の文房四宝観

古来文人は、趣味性を尊び、書斎で使用する文房具には愛着を抱いた。正平もまた同様であった（図1）。伝存する遺愛の品々は、一級の道具とは言えないものの、制作にその材質の持ち味を生かした。そういう意味で彼は単なる蒐集家ではなくむしろ実作の人であった。

ここでは正平の文房四宝観に関係する資料・文献を紹介し、正平の文房四宝観を見てみたい。まず山田正平関係資料、続いて会津八一関係資料、最後に山田寒山関係資料を提示し若干の考察を加える。

1、山田正平関係資料

山田正平関係資料から印材、印泥、印刀、印箋の順に提示する。

①要するに、印の本体は信を示すの具であり、或は禱り、想念をこめたものである。そこから形の大小も、印文の選び方も、材質も出て来る。時代の推移で、自らの変化もあらうが、根本を忘れると、印、篆刻といふものが成りたたぬ。

（「神奇」『山田正平先生篆刻講義ノート』[3]東京学芸大学書道科同窓会硯心会、昭和三十八年六月二十二日）

②出講の日は大学の教官も揃って聴講しておられた。「石はいいものですね。黙っているようだけど私に語りかけてきますよ」と、第一回の講義の日、寿山石を手にして誰にいうなくぽつりと一言いわれた。古武士のような風貌が私には忘れられない。

（筆者「アンケート」による、東京学芸大学での講義）

③開学祭に出品した倶会一処の朱文印、あれは四度目かに出来た作である。最初は依頼者が取りに来し夜分、その人を側らに置いての作、少し硬い鶏血で、事、志と違つた様であつたが渡して支舞つた。翌日思ひ直して別の石で試みた。朝の空気が爽やかなせいか、前作には勝る者が獲られたので速達で送つて置いた。

（「一点一画」『山田正平先生篆刻講義ノート』前掲）

④この頃、私の所で四五人の人が一緒に篆刻を習い始めて居ります。皆それぞれ教養のある人達ですから、こちらの話しにも推量が早く早速に刻す方も始めて見ました。石が欠けるばかりで線をなさないと困って居りましたので私が目の前で刻って見ました。なる程、稽古用の粗材でもろく欠けるところもありましたが、全局に心持ちを置いて、ゆっくりと、しかも引きしめて、少々の欠けなどは寧ろ、腕の冴え、刀筆の花くらいに心得て、充分に堂々とおやりなさいと申しました。次回から持って見える印はすっかり刀が生きて来て、忽ち五六七八と数が増して進歩が目に見えてはっきりして参りました。

（「始めて篆刻を試みる人に」『書道講座　第六巻　篆刻』、昭和四十八年二月）

⑤御欣賞の鶏血材、大二顆は、美材にて甚眼を楽しませるに堪へる品、堂々たる材質、心おくれせぬ横逸の感興などと、今より懸念ニ御座候。いま一つの方、これは一寸硬質の奏刀には不適のもの如何ニすべきや。印文五台山人御承知致し候も、何か別の手持ちの材にて試むことも有しと、此分自由御許し置き願上候。

（「桜井定一宛書簡」昭和三十五年四月十一日）

⑥先般は、印材と御手紙を受けながら、つい取紛れ失礼してしまいました。印材、たしかに、ニツの方ですか、あれはよろしいか。三ツ緑色の分は、新玉の質一寸鋏筆には適し難く、折角の御入手の品、惑は特に紀念的の物でもあれば、何とかし出来ぬこともなし。只運刀にさわやかとは参らず。御承知願度。

（「桜井定一宛書簡」昭和三十五年十月二十八日）

⑦印材三つも正ニ落掌。印文のこと拝承、材型上、万里一條鋏もよく。迂定。鉄廬。なども面白いと存じます。

（「桜井定一宛書簡」昭和三十六年十一月二十五日）

⑧一體鈕のある印材に刻印するのには
鈕に首尾のあるものは大抵首を手前に
尾が前方になるやうに刻することか近古
からの慣しとなつて居る
印泥のはなし
水印　奈良博物館　ある
　　道具
　ニュー棒　ニユー鉢　楊枝様の刷毛
印□□□のかよいか
静安平實をよしとす

（「講義ノート」山田潤平編『正平文人画』、日本習字普及協会、二〇〇一年十一月）

⑨印泥の手入れは暑中やはりよくかきまわす位の□が。冬はどうしてもかたくなり。暑中は油うく。中国の上製品はそのこと割ニ少かりしやニ思って居りました。

（資料・出典不明）（山田家蔵）

⑩朱のこと指先きにつけて作りて、結果よろしければそれニてよし。和製の色のあしきより勝らんか。要は効果なり。紙は必らず□紙と限らず。鵞牋にてもくるしからず。

（資料・出典不明）（山田家蔵）

⑪そしてこれは、徐星州からもらった刀だがお前にやると申され、お渡しになられました。

（小池邦夫「桜井定市さんの書簡より」『月刊絵手紙』第七十一号、平成十三年十一月一日）

三

⑫緒で巻こと
蛤鋒
（「講義ノート」山田潤平編著『正平文人画』前掲）

⑬印箋一枚作るにも其人の全精神を働かすべきである。またこんなことも思い出して見た。材料なども金玉、陶磁、漆木と開拓したら、また取り扱う字体も楷行草隷も試みたいなど。
若い人達よ、大きく息吹きして高き趣きを愛する現代の人達の魂を奪え。
（「篆刻の審査に当りて」『書品』第十二号、東洋書道協会、昭和二十六年一月一日）

2、会津八一関係資料

会津八一関係資料から篆刻学、印材、印譜、印泥の順に提示する。

①山田正平、石川蘭八の二人は彼等の方から私の門人と称して居りました。その関係で私から五峯先生へ紹介したのでした。しかし私は技術上の師匠でなく篆印、文字学、印章学上の師であつたかも知れません。
（坂口獻吉宛書簡、昭和二十七年二月二十九日、『會津八一全集』第十巻、中央公論社、昭和五十八年三月）

②篆刻論はこれこそ何か一冊の書物にかきて、諸家の御批正を仰ぐやうに致したきものと存じ居候。
（坪内逍遙宛書簡、大正十一年四月十日、柳田泉・長島健編『坪内逍遥會津八一往復書簡』、中央公論美術出版、昭和四十三年十二月）

③拙筆の墨蹟一、二巻とり敢えず出版のつもりにて候。その後にて書道の理論に関するもの、篆刻に関するもの、各一冊相まとめ申す可しと存じ候。
（横山有策宛書簡、大正十三年九月二十七日、植田重雄著『秋艸道人會津八一書簡集』、恒文社、平成三年一月）

四

④近来、篆刻の革新といふことを考へ居り候。考へることは実に十年もまへから考へぬいたことなれども、これからは主として実際問題を考ふべき順序と相成り候。此の事業を以て、老生が今生に於ける記念にもせばやと思ふばかりに候。
（小泉清宛書簡、推定大正十年四月三日、『秋艸道人會津八一書簡集』前掲）

⑤拙者は近来篆刻界の現状打破の必要につきて感ずるところ深く、いづれ何等かの手段方法を執ることに至るべく、その際には自分でも刀を執りて制作のつもりにて候。意見の一般は先般蝠亭と貴兄とに御話致したる通にて候。あれは前漢以来の革命にて賛否ともに喧しかるべしと楽み居り候。
（伊達俊光宛書簡、大正十一年四月二日、『秋艸道人會津八一書簡集』前掲）

⑥印は一種の文房具にてもあり、美術品にてもあり、製作の具にてもあり、高価を投じても決して不経済とは申しがたく、且つ半永久のもの故、考へればやすきものにて候。之に反して安直にして粗悪なる材に拙劣なる篆刻を加へしめたるものは、自家の鑑識の進むに従ひて、座右におくさへ堪へがたく相成るものにて候。これも拙者自家の経験に御座候。前書註解の為め如此候。
（伊達俊光宛書簡、大正八年十二月二十四日、『秋艸道人會津八一書簡集』前掲）

⑦先生の逶邐村荘の印は、印材のいゝのが見あたりませんから木印にさせることにしました。
（坪内逍遙宛書簡、大正十二年一月十一日、『坪内逍遙會津八一往復書簡』前掲）

⑧印材は佐渡相川町の佐々木邦蔵と申す老匠に命じて造らしめたるもの。篆は出発の前夜木村正平を喚びて刻せしもの。併せて御一笑被下度候。
（坪内逍遙宛書簡、大正七年七月二十一日、『坪内逍遙會津八一往復書簡』前掲）

⑨拝啓　いよ〳〵冬来り、寒く湿つぽく閉口致し居り候。さて甚だ御面倒のことにて候へども、只今印材三顆相送り候間、勝田先生へ篆刻御願ひ被下度上候。前便も申上げし如く、拙者印章百五六十顆焼失致し、使用すべきもの無く候ところ、明春正月四日より京都大丸にて拙墨個展開きたしと突然申来り、額面も五六點所望を受けしにて困居候。乍恐縮、特別大至急に勝田先生へ御たのみ被下、数日中に頂戴致したきものに存じ候。文は

北越會朔　白文
秋艸道人　朱文
渾齋　白文

自分としては日限つきの揮毫は謝絶し居り候へども、窮し来れば他へは頼み候ことにて甚だわがままの沙汰にて申わけなき次第にて候。印材は老來少しにても軽きを欲し候間、墨線のところから切断して御刻を願ひたく候。潤資も軽少にて恥かしく候へども金百五十圓封入の小為替差上げ被下度候。徹底的全焼にて嚢裏無一物の場合にて恐縮の至に御坐候。貴下へは面識も無く、失禮ながら御好意に甘え候儀と御ゆるし被下度候。これより十日間は翰墨に没頭致し候間、木村氏など御遣はし被下るまじく候。

右のみ如此候。敬具

十二月六日　　會津八一

桑山太市様

印材の切り取られたるのこりの部分も、他日何かのため利用可致候間、あはせて御送下され度候。

（桑山太市宛書簡、昭和二十年十二月六日、『會津八一全集』第九巻、中央公論社、昭和五十八年一月）

⑩秋艸道人印譜をつくりたく久しく心がけ居れども、印箋がまず出来ず、今冬までには何とか致し度候。

（坪内逍遙宛、大正九年四月五日、『坪内逍遙會津八一往復書簡』前掲）

⑪追啓　昨日稍〻大なる肉池を晩翠軒にて見つけ、早速相もとめおき候間、不日御眼にかけ可申候。つきては先生には小生所用の朱肉を御目にとめさせられ、同様のものとの御命にて候へども、尚ほ別紙印色四種比較して御目にかけ候間、更に御高鑑相ねがひ候。李肅之印東西南までは晩翠軒の特製にて、北は小生現在所用のものに御座候。東は少しく古色を含めて黒味を帯びしめしもの、これは當今最も黒人筋の愛用するもの、殆ど朱と茶との間とも見ゆるばかりに御座候。南は最も世俗門外の人の眼に喜ばれ候ものにて所謂黄口と申すもの、小生はこれを好み申さず候。西は其間にてこれ小生愛好の色に御座候。日常小生の用候ものはこれに似て稍〻相劣り候やうにて候へば、先生へは西を御すゝめ申上度存じ候ところ如何候哉。

東ハ一匁　十銭　北は一匁　七銭
西ハ一匁　九銭
南ハ一匁　六銭

値段の示すところにみても、黄口の格式は明瞭なるに、世俗の人印肉は黄ばみたるものとのみ思ひ、小生所用のものをさへかれ（ママ）申し候もの稀ならず候こと、笑止千萬と存じ候。畫より書は朱肉の少しく黒みを帯びたりと見ゆるばかりのもの上品にて、落ちつきありと相信じ候。敬具

八月十一日　　會津朔

逍遙先生　函丈

印色の御比較は畫間になし披下度、灯火にてはとかく黄口のみ目につき可申候。

（坪内逍遙宛書簡、大正七年八月十一日、消印八月十一日、『会津八一全集』第八巻、昭和五十七年十一月）

⑫尚ほ〳〵昨年御とりつぎ申上たる印肉ハ、油のわき候やうすも御座なく候哉。たいてい心配なき考にて候へども、念の為め肉池をさかさまになしおき被下候はゞ安全に御座候。

（坪内逍遙宛書簡、大正八年五月八日、『坪内逍遙會津八一往復書簡』前掲）

⑬御印肉酷暑の為め少しく油わき候やうに、印影にて拝見致し候然らば蓋のまゝにてさかさまになしおき被下度候。

（坪内逍遙宛書簡、大正九年七月十五日、『坪内逍遙會津八一往復書簡』前掲）

⑭絖本はよろしく候へども、絹は印肉のつきもあしく、篆刻癖の拙者としては

ことに好まず候。

（式場益平宛書簡、大正九年一月九日、和泉久子著『新資料付注会津八一書簡集―式場益平宛書簡―』笠間書院、昭和四十三年二月）

3、山田寒山関係資料

山田寒山関係資料から印の製法について提示する。

①山田寒山、山田正平宛書簡、（年月日不明）、（山田家蔵）

大森宗伯爵家ノ
届ケモノ銀印小包
ニテ送ル
電話ニテ在否ヲ
タシカメ特ニ持参スヘシ
此印ノ製法表裡印
面ノ具合等微細ニ実
見シテ記憶スヘシ将
来以此印法発達
センコトヲ要ス
家人一同ニ能ク示シ
説明ヲシテヲケ
製法ハ其内一度呼寄
伝授スルモノナリ

寒山

正平子

（山田寒山、山田正平宛書簡、年月日不明）（山田家蔵）

②陶印を始めましたのは、昔京都に玄々斎と云ふ名人がありましたが、近頃では、私が東京へ来て二十八年にやつたのが始めてだ、マー中興とでも申しましよ。今日では濱村も造りますし、又岡本椿處が、佐渡の常山に従つて陶法を学び、大分やるので流行して来ました

銅の鋳印といふものは、陶印よりは一層趣味の深いもので、折角造つた篆文が、湯の廻り工合でシ偏がン偏になつたり、一やーが消へたり、天然の鋳分で色々字形に変化を現はします工合は、トテモ人工の及ぶ所でありません

（「鉄筆閑話五（山田寒山師談話）」『明治・大正期山田寒山関連新聞資料』年月日不明（4））

六

正平の文房四宝観を探るため、山田正平関係資料を、続いて会津八一関係資料、最後に山田寒山関係資料を掲げた。これにより、いかに正平が文房四宝に意を用いていたかが理解できる。当時中国から舶載される文房四宝はそれほど多くなかったと思われるが、その中で可能な限り蒐集し、実際に使用した。作家としての立場で文房四宝に対している点はやはり注目してよい。山田正平関係資料の中で、印材に関する①、③、④、⑤は、篆刻家としての経験のいる事柄であり、正平は印材の質を知りぬいていたと考えられる。

また別に山田家に数種の正平が使用した用具・用材が遺されている。印泥（図2）、印刀（図3）、鑿、筆墨硯紙などである。

印刀に関して紹介する。三種の印刀が山田家に伝えられている。

①両刃　刀身に、「正平先生清嘱、庚寅十二月昭平作」とある。

②片刃　刀身に、「昭平作」とある。

③両刃　刀身に、布が巻かれている。

正平の使用した印刀は、かなり厚手のものであり、鈍刃である。彼の篆刻の作風は重厚で韻致の高いものであるが、このような印刀だからこそ生み出されたことも頷けよう。

四　おわりに

山田正平の用具・用材について、山田家に遺された遺品や、関係資料から探ってみた。

一流の芸術家は手に合った一流の道具を使用すると言われる。それは用具・用材が作品に大きい影響を及ぼすからである。現今の篆刻作品を見てみるに、幾分技巧に過ぎ生彩に乏しい気がする。篆刻の用具・用材と技法に問題がなかろうか。篆刻は展覧会の会場に展示されるようになり、その寸法は大きくなり、デザイン的要素が強くなってきた。今こそ篆刻の本来の在り方、またオリジナル性を考えてみる必要があろう。かつて古筆学を大成された小松茂美先生は、「仮名が本来持っている美しさは、色紙大の寸法に凝縮されるものである」と語られた。篆刻も同じく一寸四方の大きさに、その美を盛り込むものと言える。山田正平の作品や用具・用材観に触れるにつけこのことが思われる。

本稿は、平成十六年十二月十八日に開催された「平成十六年度熊本大学　熊本・大学国語国文学会」での口頭発表に新知見を加え、新たに考察するとともに、新資料を提示し、山田正平の研究の一端を明らかにしたものである。今後も更に基礎資料の蒐集・整理を進めるとともに、実証的な考察を加えてゆきたい。

本稿執筆に際し、山田家にお世話になった。心から感謝申し上げる。

【注】

（1）中井敬所の『日本印人伝』は、わが国の印人伝における唯一の専著と言えるもので、好著である。敬所の『印人伝』に関して「日本印人研究―中井敬所の高芙蓉研究―」（『大学書道研究』第一号、全国大学書道学会、二〇〇八年三月）で考察した。わが国における印人伝の最初の編纂は、文化文政の頃、永根伍石により行われた。しかし、現在では佚して伝わらない。『日本印人伝』は、敬所の未完の稿本を、敬所の七回忌である大正四年（一九一五）に、女婿新家孝正の手により上梓されたものである。校正にあたったのは姪の石川文荘と門人の岡村梅軒を中心とする六人である。その一人が寒山である。本書は未定稿であるものの、わが国印人伝の唯一の著述であり、価値あるものといえる。同著は『日本の篆刻』（二玄社、一九六六年十一月）に水田紀久先生による訓読校注が掲載されている。さらに『続補日本印人伝』の増訂がある。

（2）山田正平に関する年譜はこれまで数種編まれている。中でも最も基本資料となるのは、山田家に蔵する、正平自身が昭和三十三年に作成した「自記年譜」（増補版『山田正平作品集』前掲）である。これは原稿用紙三枚にわたりペン書きされたもので、明治三十二年正平の生年から、昭和三十三年正平六十歳まで、かなり詳細なものである。これ以外に、正平自身作成した略年譜が三種類ある。昭和五十九年に開催された「第三回山田正平遺作展」に出陳された「毛筆履歴書」は、正平の芸術を語る上で、重要な内容となっている。他は覚え書き程度である。

さて、山田正平は日頃スケッチをすることが多かったが、それにはその時々の足跡が克明に記されており、画日記ともいうべきものになっている。これはスケッチブックやノートに書かれており五十数冊にわたっている。筆者は、かつて山田家のご承諾を得て、詳細な年譜を作成すべく、スケッチ帖、並びに関係資料を複写させて頂いた。これらは年譜作成に欠くことのできない重要な一次資料といえる。

次に、正平没後編集された年譜がやはり数種ある。『山田正平作品集』（山田喜美子編、木耳社、昭和五十一年）に収められている年譜は最も詳しいものである。これは、山田正平御令室山田喜美子、並びに元昭和学院教師関健一、東京学芸大学名誉教授小木太法先生などにより作成されたものである。また、これと記載はほとんど同じであるが、『一止道人山田正平先生の書簡』（佐藤耐雪編著、佐藤耐雪後援会、昭和五十四年一月）に年譜が附されている。

これ以前には三種の年譜がある。その一は、伏見冲敬が作成した「山田正平先生略年譜」（『書品』第一三五号、東洋書道協会、一九六二年十一月十五日）である。その二は、昭和三十九年八月に中央公論画廊で開催された「第一回山田正平遺作展」の時に刊行された図録に附された年譜（中央公論美術出版）である。その三は、昭和四十六年十二月に魅丹古美書道出版会より孔版印刷出版された、東京学芸大学卒業の高橋達郎氏の卒業論文『山田正平論』に附されているものである。

筆者は、山田正平に関して過去四度にわたり年譜を編み系図を作成した。ここに列記しておく。

① 山田正平年譜・山田家系図（増補版『山田正平作品集』前掲）
② 山田正平年譜・山田家系図（『山田寒山・正平展図録』篆刻美術館、平成四年十一月）
③ 山田正平略年譜（『墨』通巻第一五二号、芸術新聞社、平成十三年十月）
④ 「山田正平年譜―附、山田家系図并に山田正平研究文献目録―」（『山田正平展―寡作な文人篆刻家―』篆刻美術館、平成十六年九月）

筆者は山田家に遺された正平が描いた画帖日記の書き入れをすべて含んださらに詳しい年譜を用意しているが、改めて紹介したい。

（3）『篆刻講義ノート』は、山田正平が東京学芸大学で講じた講義用のノートやちらしなどに書かれたメモを、書道科同窓会「硯心会」の有志が纏めたもので、これまで二度刊行されている。目次を挙げる。

① 『山田正平先生篆刻講義ノート』（東京学芸大学書道科同窓会硯心会、昭和三十八年六月二十二日）
・田辺萬平「序」
・篆刻講義ノート
・伊東寿「遺稿に学ぶ」
・鈴木武夫「山田先生と吉福の雅印」

・吉田繁「思ひ出の断片」

②『〈回顧〉山田正平―東京学芸大学における教育者としての側面―付篆刻講義ノート』（東京学芸大学書道科硯心会　平成十六年七月二十日）

（平成十五年十一月三日、東京学芸大学において、「山田正平先生を語る」シンポジウム開催される。〈シンポジスト　小木太法、杉本猟香、塚本虚斎、益子素州、神野大光〉）

・蔵元訓征「ごあいさつ　感化―山田正平展に寄せて―」

・山田正平展展示資料

・「山田正平先生を語る」シンポジウム

・「山田正平先生篆刻講義ノート〈復刻〉」

・山田正平年譜

・岩切誠「あとがき」

（4）山田寒山を研究する時に、山田家に所蔵される寒山関連の新聞記事の切り抜きを貼り込んだスクラップブックは貴重である。同資料は平成十五年度全国大学書道学会徳島大会において紹介しその価値を論じた。また『国語国文研究と教育』第四十三号（熊本大学教育学部国文学会、平成十八年二月二十日）において「日本印人研究―明治・大正期新聞資料における山田寒山関連記事見出し一覧稿」と題し、見出し一覧の索引を作成し、より詳細に論じた。切り抜きは、東京市京橋区采女町廿二番地にあった東京切抜通信社による。新聞は全国紙に亘っており、重複する記事も多い。また新聞は古く劣化がすすんでおり、文字不明の箇所や、新聞名さえ判読できないものが数多くある。ただこれは寒山研究にとって一級の資料である事はいうに及ばず、当時の芸壇の風流を知る上で欠くことができない。これを読むに彼の生涯、芸術観、芸苑での逸話などがあり興味は尽きない。これから寒山の伝記、芸術（詩、書、画、篆刻、陶芸）また当時の芸壇、印壇の様子などが伺える。

同索引は、本年度刊行する『日本篆刻家の研究―山田寒山・正平を中心として―』（熊本日日新聞社）に加筆修正の上収録する予定である。

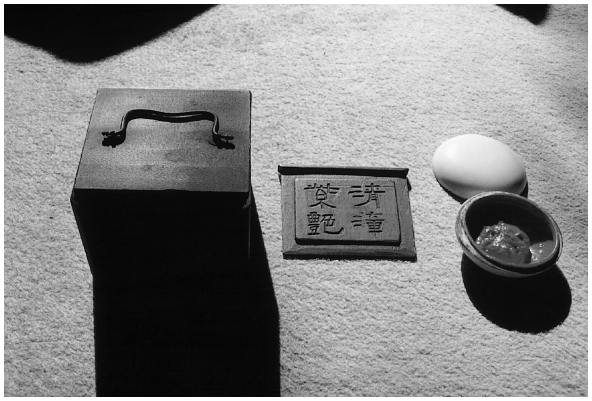

図２　山田正平使用印泥

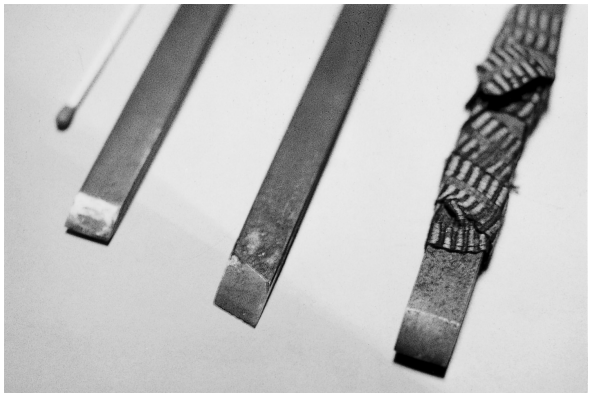

図３　山田正平使用印刀

図１　山田正平の蔵書並びに用具・用材